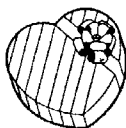


～メッセージ～  
みなみの風に乗せて



「障害」って、どういうこと？ ～前回No.8の続き～

わたしたちがふつう「障害」というとき、それはつぎの2つのことをさしています。

- 1 なんらかの原因で、体の仕組みがうまく働かず、その状態がかわらないこと。
- 2 1の結果、学校や地域で生活していくときに、なんらかの不都合があること。

しくみがうまくはたらかなければ、不都合があるのはあたりまえだと思いますか？ でも、そうとばかりはかぎりません。では、どういうときに不都合がおこるのでしょうか？

「不都合」って、こういうこと①

白杖は、盲（ほとんどみえない状態）の人があるときにつかうつえです。1、2歩先をさわって、路上の目印や路面の変化、たとえば障害物や段差がないかを確認することができます。点字ブロックは、歩道や駅、公共施設などに設置されています。点字のブロックは、階段の前やまがり角で、いったん、とまることを、線状のものは、そのまますすめることを足のうらやつえにつたえています。

このように、白杖という道具や点字ブロックという設備があれば、「みえない」という不都合をおぎない、視覚障害のある人でも一人でもちをあるくことができるようになります。

「不都合」って、こういうこと②

人は、自分がいきたい場所に、いきたいときにいき、したいことをしてすごせるのが望みです。障害があっても不便な部分は、道具や設備、人のてだすけでおぎないながら、おなじように、自由に移動し、したいことができるのが、いいにきまっています。でも、道具は、活動の一部分をたすけるもので、なんにでもつかえるとはかぎりません。障害のある人のための設備は、そのことをよく理解していない人の不注意で、つかえない状態になっていることもあります。人にたのんでしてもらおうことには、気持ちのひっかかりが生じることもあるでしょう。

これらのことが、さまざまな不都合をうむ原因となっているといえるでしょう。

「不都合」って、こういうこと③

みんながよく知っている「フルーツバスケット」。おにによばれるくだものの役の人が、たがいにいすをとりあうゲームです。自分がバナナの役なのか、りんごの役なのか、それともみかんやぶどうなのかを、ちゃんとわかっていることで、なりたつゲームです。多くの人は、このゲームのうえでの役割をあたりまえにこなすことができます。

ところが、たとえば知的障害のある人などは、このゲームに参加することがにがてです。

言葉の発達が十分でないことなどから、たとえ話や目に見えない役割を理解できず、自分がここではバナナの役であるということをわかりづらいのです。

### 「不都合」って、こういうこと④

「フルーツバスケット」を、たとえば「あかい服をきている人」「めがねをかけている人」といった具体的な条件をだしてすすめることにしたらどうでしょう。これなら、自分があてはまるかどうかの判断がついて、ゲームに参加することができるのではないのでしょうか。つまりルールをやさしくすることで、いっしょにたのしめるようになるわけです。

## まとめ

なにが「不都合」なの？

体のしくみがうまくはたらかないところがあると、生活していくときになんらかの不都合がおこります。でも、その「不都合」は、よくかんがえて、つぎのような工夫をすることで、へらせることもあります。

- 1 その人にあつた道具や設備、手助けを必要なときに用意すること。
- 2 その人にあつたルールをきめて、いっしょに参加できるようにすること。

その人のためになにかを用意するって、特別あつかいで、その人が「いちにんまえ」じゃないみたいに思えるのでしょうか？はたしてどうなのでしょう。

### 障害があると「いちにんまえ」にならないの？

「いちにんまえ」の大人って、なんだと思いますか？いろいろな勉強をして、その知識をもとに自分でかんがえ、自分のことを自分できめる。それができれば「いちにんまえ」。だからこそ、障害のあるなしにかかわらず、すべての人に

- 1 教育をうける権利
- 2 自分のすきなように、すきなところでくらす権利
- 3 自由に職業をえらび、はたらく権利



が保障されているのです。障害のある人も、ない人も、みんなおなじ「いちにんまえ」。特別あつかいに思えてしまうのは、人の気持ちと社会のしくみに、まだ問題があるからです。

### いっしょに生きていくために①

共に生きる  
社会に！

社会にはさまざまな人がいるけれど、よわい人もつよい人も、障害があってもなくても、すべての人が自分らしく、しあわせにくらせる社会であってほしい……。そういう社会にするために、障害のある人が不自由なく社会生活をおくれるよう、さまざまところで設備やサービスが工夫され、ととのえられてきています。しかし、その数はまだ十分とはいえず、障害のある人がいつでもどこでも利用できるほどではありません。だれもがつかえる設備であるからこそ、必要な人がいつでもつかえるようにしておくのがマナーです。

～続きは次回、No.10で～